

2. 現在までの研究状況 (図表を含めてもよいので、わかりやすく記述してください。様式の改変・追加は不可(以下同様))

- ① これまでの研究の背景、問題点、解決策、研究目的、研究方法、特色と独創的な点について当該分野の重要文献を挙げて記述してください。
- ② 申請者のこれまでの研究経過及び得られた結果について、問題点を含め①で記載したことと関連づけて説明してください。  
 なお、これまでの研究結果を論文あるいは学会等で発表している場合には、申請者が担当した部分を明らかにして、それらの内容を記述してください。

**□これまでの研究の背景・問題点**

世界のグローバル化が進むにつれて、《都市的なもの》が農村部へ流入し、そして農村部からも大量のヒト・モノが《都市的なもの》へと流出していった。具体的には、大量生産された商品やサービスが、農村部においても購入・利用可能になり、そして《都市的なもの》の工業化、産業化を支えるべく、たくさんの人びとが農村部から出稼ぎに出かけるようになった。こうした急激な社会変化は、農村部がそれまでに残してきた伝統的な生活文化の存続に影響を及ぼしている。

ここで着目したいのは、こうした《都市的なもの》との接触が急激な社会変化を引き起こし、最終的に人びとの健康を損なう可能性がある、ということである。特に発展途上国では、保健医療サービス、インフラ、教育システムなどの整備が不十分なまま、急激な都市化と市場経済化が進んだため、旧来の急性感染症の減少を伴うことなく、生活習慣病などの慢性疾患が増加している(Martens et al., 2003)。他にも、出稼ぎ労働者が出稼ぎ先で受ける健康への影響(Zhang et al., 2009)が示唆されたり、人口流出に伴う社会関係資本の低下(Yip et al., 2009)や再生産システムの崩壊危機(とくに嫁不足(蔣, 2004))などが報告されたりしている。こうした一連の変化は、農村部コミュニティの持続的な健康・生存に大きな影響を持つ。

**□これまでの研究の目的・方法**

申請者の研究の目的は、上述するような急激な社会変化が農村部コミュニティに与える健康影響を明らかにすることである。とくに博士課程終了までは、そのなかでも中国少数民族居住地域における健康影響を総合的に理解することを目指している。それは、急激な社会変化の影響が《周辺部》に暮らす人びとの生活環境に顕著に現れる(篠原, 2004)ことが経験的に知られているためであり、負の健康影響を引き起こされる可能性が高いためである。



申請者は、中国海南島農村部に暮らす少数民族「リー(黎)族」を対象に調査を行っている。海南島農村部は 2000 年以降、換金作物栽培や観光開発などによって急激な生活環境の変化を経験している。調査の具体的内容は、人類学の分野で確立された参与観察を基礎として、彼らの生活様式の理解からはじめ、1980 年代の改革開放以降の生活環境の変遷を整理した。さらに健康状況を主観的健康と客観的健康指標の両側面から評価してきた。健康は、疾病への罹患の有無や健康指標の高低(高血圧、高血糖など)といった客観的な健康指標だけで判断するのではなく、本人が自身の健康や QOL(生活の質)をどう主観的に捉えているかという観点からも評価する必要があるとされている。

**□これまでの研究の特色と独創的な点**

- ・ 近年の市場経済化の影響が大きい中国海南島を対象に、急激な社会変化に付随して発生する健康影響に関して調査を実施している点。
- ・ 先行研究が世帯レベルを分析の対象としてきたのに対し、個人に焦点を当てた in-depth 調査を行っている点。

**□これまでの研究成果・経過**

これまでの調査のなかで明らかになったことは、以下の 3 点に集約される。

1. 五指山市農村部では、出稼ぎや換金作物の栽培の従事を通じて、低所得への対応を行っている。

近年、所得向上のために、出稼ぎや換金作物の栽培に従事する人が増えてきた。さらに申請者が調査を行った水満村では観光業による収入が貧困状態の改善につながっている。出稼ぎは、主に若者によるもので、都市部(商業の中心である海口や観光都市である三亜など)でのサービス業・建設業、さらに農村部他地域での農林業への従事が多数を占める。ほぼ全ての若者が、中学校卒業後に出稼ぎに出かけ村を離れるため、コミュニティ機能の低下が観察される。なお、換金作物は、リュウガン、ピンロウ、バナナ、茶などが代表的である。

2. 出稼ぎ、換金作物栽培、観光業で得た経済資源は、必ずしも健康に有利に働くわけではない。

現金収入の獲得機会が増え、テレビやバイクなどの耐久消費財、カラオケや携帯電話などのサービスが利用可能になるなど、生活は次第に「豊かな」ものになりつつある。しかしその一方で、アルコールやタバコなど嗜好品の消費、塩分・油分・化学調味料の過剰摂取、化学農薬の使用もまた可能となり、これらの健康への影響が懸念される。

また上記のような客観的健康指標の悪化が示唆されるのに加え、主観的 QOL(生活の質)の悪化も観察される。たとえば、観光地化が進んでいる水満村では、大きく生活水準は上昇したが、人びとの生活に関する語りは現状を否定するものであった。これは、観光開発が進む前(2000 年)に記述された民族誌(梅崎, 2004)とは対極をなすものであ

(現在までの研究状況の続き)

る。観光開発によって就業状況の差が村人の間に生まれたことが、「伝統的」に平等を志向してきたコミュニティ内にさまざまな断裂を生み出したと考えられる。

### 3. 収入が世帯内で等しく分配されていない。

先行研究では、ひとつの世帯にもたらされた所得は等しく世帯構成員に分配されると仮定して、収入と健康の関係について分析を行う。しかしながら、観光業や出稼ぎへの従事によって個人が獲得した収入が世帯内で分配されないケースを申請者はしばしば観察した。たとえば、出稼ぎからの帰還労働者への聞き取りでは、多くが出稼ぎによってえた収入を世帯内の他の構成員に分配せず自分で消費すると回答した。ほとんどが遊興費などに使用される。これはコミュニティ間や世帯間だけではなく、世帯内の不平等にも焦点を当てた研究の必要性を高めるものである。

これまでの成果の発表は、中国（海南）黎族文化中日研究会（中国語による発表）、および第80回日本衛生学会で行った。申請者が行った五指山市水満村における調査について、その中でも特に観光開発によって生まれた雇用状況の格差が人びとの主観的QOLにどのような影響を与えたかについて発表を行った。10年も経過しないうちに急速に観光開発が本格化した水満村で主観的QOLを評価し、観光業への従事の有無による2群間で比較したところ、観光に関連する仕事につけなかった人びとの主観的QOLが、統計学的に有意に低いことが分かった。

#### ▼参考文献

- Martens, P. et al. (2003). A future without health? Health dimension in global scenario studies. Bulletin of the World Health Organization, vol. 81, No. 12, pp.896-901
- Zhang, J. et al. (2009). "Discrimination experience and quality of life among rural-to-urban migrants in China: the mediation effect of expectation-reality discrepancy". Quality of Life Research. Vol.18 No.3: pp. 291-300.
- Yip, W. et al. (2007). "Does social capital enhance health and well-being? Evidence from rural China". Social Science and Medicine. Vol. 64, pp. 35-49
- 蔣宏偉 (2004). 「換金作物と貧困克服の試み」『中国・海南島—焼畑農耕の終焉』. 東京大学出版会.
- 篠原徹(編). (2004). 『中国・海南島—焼畑農耕の終焉』. 東京大学出版会.
- 梅崎昌裕 (2004). 「環境保全と両立する生業」『中国・海南島—焼畑農耕の終焉』. 東京大学出版会.

## 3. これからの研究計画

### (1) 研究の背景

2. で述べた研究状況を踏まえ、これからの研究計画の背景、問題点、解決すべき点、着想に至った経緯等について参考文献を挙げて記入してください。

申請者は五指山市における長期のフィールドワークを通して、現代社会においてはどんな辺鄙な農村に生きる人びとの生活にも「都市的」な要素が内在することを改めて認識した。人びとはテレビを通じて都市の情報を受け取り、都市部で生産された耐久消費財を利用する。出稼ぎから戻ってきた多くの人びとは都市的な生活の経験を持つ——こうした農村部コミュニティに内在する《都市的なるもの》は、食生活・労働形態・行動の変容を介して、人々の健康に大きな影響を及ぼしており、《都市的なるもの》との接触の程度の違いが、個人の健康を決定するという仮説を立てることができる。

このような仮説を検証する際には、従来のような「都市—農村」という分析の枠組みは不適切であり、様々なレベル(個人レベル、世帯レベル、村落レベル)でどのような《都市的なるもの》が存在するか把握し、それぞれの健康への影響を正と負の両面から評価することが必要である。しかしながら、先行研究には以下にあげるような問題点が存在する。

- 人口移動が頻繁に起こっているにもかかわらず、先行研究では閉鎖的なモデルを想定していることが多い。たとえば都市からの帰還労働者は、分析の対象外とされてきた。こうした研究デザインは、人口移動が頻繁に起こっている現実世界からかけ離れたモデルを想定しており、農村部コミュニティの健康を評価しているとは言えない。
- 都市化が健康に与える影響について調べた先行研究では、村落自体の都市化の程度を評価し、それを村落の構成員すべての《都市的なるもの》の影響と仮定して健康の評価に用いてきた。しかしながら、都市的環境への接触の程度は、同一村落内でも個人間差が存在する。

本研究では、《都市的なるもの》の中でも出稼ぎからの帰還労働者に着目する。彼らは、都市部に出かけ《都市的なるもの》に多く接触し、健康への様々な影響を受けているという点、さらに彼ら自身の存在が農村部コミュニティにとっては《都市的なるもの》であるという点で特殊である。先行研究(Li et al., 2006)では、同じような境遇にいるべきだと感じている人(reference group)との間に発生する格差が、主観的QOLに大きな影響を与えることが示唆されており、出稼ぎからの帰還労働者や彼らが持ち帰るものが農村部コミュニティでどのように捉えられているかに注目したい。

#### ▼参考文献

- Li, H. et al. (2006). "Income, income inequality, and health: Evidence from China". Journal of Comparative Economics. Vol.34 pp.668-693.

申請者氏名 井上陽介

(2) 研究目的・内容 (図表を含めてもよいので、わかりやすく記述してください。)

- ① 研究目的、研究方法、研究内容について記述してください。
- ② どのような計画で、何を、どこまで明らかにしようとするのか、具体的に記入してください。
- ③ 共同研究の場合には、申請者が担当する部分を明らかにしてください。
- ④ 研究計画の期間中に異なった研究機関（外国の研究機関等を含む。）において研究に従事することを予定している場合はその旨を記載してください。

□研究の目的

本研究の目的は、《都市的なもの》との接触の程度の違いが、個人の健康を決定するという仮説を検証することである。上述のように、様々なレベル(個人レベル、世帯レベル、村落レベル)でどのような《都市的なもの》が存在するか把握し、それらの健康影響を正と負の両面から評価することを目的とする。

□研究方法・内容

本研究は、参与観察を基礎としたフィールドワークを通して、社会経済的なコンテキストがことなる7村落で実施する(調査内容の詳細は下表の通り)。水満村は観光開発、保力村は換金作物栽培がそれぞれ盛んな村落である。初保村、大平村、毛脳村にはどれも農業以外に主たる産業はないが、大平村が都市近郊に位置する村落であるのに対し、初保村、毛脳村は都市中心から離れた場所に位置するという違いがある。毛脳村は水満村から地理的に近く、水満村の観光開発の影響を相対化することを目的として調査を実施する。

なお、申請者は、本申請書で示した仮説を実証するため、博士課程終了後も継続して調査を行っていく予定である。よって、本研究はベースライン調査という位置づけにもなる。

調査大項目		調査内容詳細	《都市的なもの》/ 健康が評価される レベル
《都市的なもの》の評価	基礎情報	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新中国成立(1949年)以降の生活環境の変化:長期的な生業変化</li> <li>・ 家系図の作成:通婚圏もあわせて把握する。</li> </ul>	村落 -
	市場経済化・都市化の評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 都市化指標による評価(BM. Popkin 教授による)</li> <li>・ 健康の社会的決定要因の評価(WHOによる) 公衆衛生/医療施設/食生活/教育の経時的変遷の聞き取り</li> <li>・ 世帯ごとの生産・消費活動の把握</li> </ul>	村落 村落 世帯/個人
	人口移動調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 過去の人口移動(出稼ぎ、通学、従軍など)に関する聞き取り調査</li> <li>・ 携帯電話への電話による追跡:出稼ぎの性質、期間、場所、賃金、居住環境、労働環境、交友関係、出稼ぎ期間中の主観的健康の変遷</li> </ul>	個人 個人
エンドポイント(健康)	健康状態評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>□農村部コミュニティ内/出稼ぎ労働者の両方を対象とする調査内容</li> <li>・ 健康状態に関する調査:Body Mass Index の算出、感染症、下痢</li> <li>・ 主観的健康に関する調査:WHOQOL-BREF。</li> <li>・ 身体活動量の調査:身体活動量を計測するアクセロメータを使用。</li> <li>・ 食事調査(食品摂取品目の調査)</li> <li>□農村部コミュニティ内のみでの調査内容</li> <li>・ 保健医療統計(海南省 CDC による)(※1)</li> <li>・ 生体試料の収集・分析(※2):慢性疾患 尿検査、血糖値、血圧</li> </ul>	個人 個人 個人 世帯/個人
		備考	<p>(※)質問紙の妥当性を検討するための予備調査(2010年秋実施予定)を行う。</p> <p>(※1)海南省疾病预防控制中心(海南省疾病预防コントロールセンター)</p> <p>(※2)生体試料の収集・分析は、海南省 CDC と東京大学大学院人類生態学教室の共同プロジェクトとして、申請者が中心となって実施する。</p>

□想定される成果目標

[1.歴史的変遷の整理]

- ・ 様々な《都市的なもの》が 1949 年以降、農村部コミュニティの中でどのように拡がり、また現在はどのように存在しているか整理される。
- ・ 《都市的なもの》が農村部コミュニティに与えてきた健康影響について、海南省 CDC から提供される過去の医療統計データの分析を通して、正と負の両側面から記述的に整理される。

[2.《都市的なもの》との接触と健康の関係についての統計学的分析]

- ・ 統計学的な分析を行ない、《都市的なもの》との接触と健康レベル(客観的健康指標と主観的健康)との関係が明らかにされる。

**共同研究機関:** 申請者が所属する東京大学大学院人類生態学教室は、海南省民族博物館および海南省 CDC と研究協定を締結しており、調査許可を得る際の協力依頼が可能である。海南省民族博物館とは2000年から共同研究を実施している。海南省 CDC とは2008年、生体試料の収集・分析(n=600)を共同して実施した実績がある。

申請者氏名 井上陽介

### (3) 研究の特色・独創的な点

次の項目について記載してください。

- ① これまでの先行研究等があれば、それらと比較して、本研究の特色、着眼点、独創的な点
- ② 国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ、意義
- ③ 本研究が完成したとき予想されるインパクト及び将来の見通し

#### □本研究の特色

- ・ 急激な社会変化が《周辺部》に暮らす人びとにどのような影響を与えているか明らかにするべく、健康という側面に焦点を当てて、in-depth 調査を実施する点。
- ・ 農村部コミュニティの健康を理解する際に、外的要因(主に収穫などの人口移動)を包含したモデルを想定して、研究をおこなっている点。
- ・ 短期の人口移動の実態を理解するために、携帯電話を利用した追跡調査という先行研究にはない調査方法を開発する点。

#### □本研究の位置づけ

- ・ 中国海南省の《周辺部》に暮らす人びとの生活環境がどのように市場経済化の影響を受け、そして人びとがどのようにそれに対応しているか、また対応できないでいるか、現状を理解することができる。
- ・ 近代化・都市化などによって生じる社会変化が農村部コミュニティにどのような健康影響を与えるか、中華人民共和国少数民族居住地域で調べられる、はじめての in-depth 調査である。

#### □本研究のインパクトおよび将来への見通し

- ・ 本プロジェクトで得た知見を活かし、急激な社会変化が進むほかの国・地域においても、健康への悪影響を避ける施策を立案することができる。
- ・ 世界一の人口を有する中国にて、《周辺部》に暮らす人びとを観察することを通じて、近代化が人びとの生活に及ぼす健康影響を明らかにすることで、人類全体の持続的な健康を達成へ結びつける。

### (4) 年次計画

#### □1年目(博士課程2年):対象とする村落にそれぞれ50日間ずつ滞在する。

[村落調査] 50日間の内訳:身体計測の実施、および家系図の作成(10日) / 村人を対象とした収穫に関する質問紙票調査(10日) / 20世帯(目安)を対象にした消費行動に関する聞き取り(7日) / 3世代(15-29歳、30-49歳、50歳-)の男女10人ずつ、合計60人のQOL評価(10日) / アクセロメーターによる身体活動量の測定(50日×1時間) / 食事調査(50日×2時間) / 残りの約7日は移動日を含めた予備日とする。

[電話による追跡調査] 春節にあわせ帰郷する村人たちから収集した電話番号をもとに2ヶ月に一度程度電話による調査を行う。収穫に関する近況のほか、主観的健康観に関する質問を行う。

#### [その他]

- ・ 博士課程1年目の調査で得た結果に関して、2つの国内関連学会(生態人類学会、日本国際保健医療学会)で発表する。
- ・ 博士課程1年目の調査で得た結果に基づき、関連する国際誌(Social Science and Medicine)に投稿する
- ・ 中国側の研究者(海南省CDC、海南省民族博物館、北京大学)との交流および討論会を実施する。

#### □2年目(博士課程3年):村落調査の継続、生体試料の収集、データ分析

[村落調査] 博士課程2年目で実施した調査の残りを実施する(50日間)。詳細は1年目と同様。

[生体試料の収集] 2日+1日(予備日)×7村落=21日

[収穫先での調査] 海口、三亜、文昌へ収穫を行っている上記7か村の出身者を訪問し、食事調査、身体活動量などを計測する。(10日×3箇所)

#### [その他]

- ・ 収集したデータを統計的に分析する。
- ・ 少数民族の健康転換のプロセスに関する現代的な課題と将来の研究の見通しを導き出す。
- ・ 研究のまとめとして博士論文を書き上げるほか、国際学会での発表および国際学術誌(American Journal of Human Biology)への投稿を行う。

申請者氏名 井上陽介

4. 研究業績（下記の項目について申請者が中心的な役割を果たしたもののみ項目に区分して記載してください。その際、通し番号を付すこととし、該当がない項目は「なし」と記載してください。申請者にアンダーラインを付してください。）

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書（査読の有無を区分して記載してください。査読のある場合、印刷済及び採録決定済のものに限ります。査読中・投稿中のものは除く）

- ① 著者（申請者を含む全員の氏名を、論文と同一の順番で記載してください。）、題名、掲載誌名、発行所、巻号、pp 開始頁－最終頁、発行年をこの順で記入し、著者の所属・職については脚注に記載してください。
- ② 採録決定済のものについては、それを証明できるものを P.8 の後に添付してください。

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説

(3) 国際会議における発表（口頭・ポスターの別、査読の有無を区分して記載してください。）

著者（申請者を含む全員の氏名を、論文等と同一の順番で記載してください。）、題名、発表した学会名、論文等の番号、場所、月・年を記載してください。発表者に○印を付してください。（発表予定のものは除く。ただし、発表申し込みが受理されたものは記載しても構いません。その場合は、それを証明できるものを P. 8 の後に添付してください。）

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

(3)と同様に記載してください。

(5) 特許等（申請中、公開中、取得を明記してください。ただし、申請中のもので詳細を記述できない場合は概要のみの記述で構いません。）

(6) その他（受賞歴等）

(1) 学術雑誌等（紀要・論文集等も含む）に発表した論文、著書

なし

(2) 学術雑誌等又は商業誌における解説、総説

1. 稲場雅紀、井上陽介 平成 17 年度 外務省 NGO 活動環境整備支援事業「NGO 研究会（保健分野支援における分野横断的取組）」報告書『NGO のマラリア対策ベーシック・ハンドブック』、2006 年 3 月

(3) 国際会議における発表

2. 井上陽介「海南黎族地区的经济开发对居民健康的影响：水满村の事例」（中国語）、『中国（海南）黎族文化中日研讨会』、2009 年 12 月

(4) 国内学会・シンポジウム等における発表

[口頭・査読なし]

3. 井上陽介、梅崎昌裕「中国海南省における格差と QOL：観光開発の進む村落における事例」、『第 80 回日本衛生学会学術総会』、2010 年 5 月
4. 井上陽介、梅崎昌裕「日本における出生性比の地理的不均一性 ～市区町村データを用いた空間統計学～」、『第 60 回日本人口学会』、2008 年 6 月
5. 深町美那穂、井ノ口珠喜、高橋都、斉藤民、大久保豪、滝澤彩子、飯塚愛恵、井上陽介、越智真奈美、黒田光代、甲斐一郎「育児就労女性の性的満足度の関連要因に関する調査研究」、『第 71 回日本民族衛生学会総会』、2006 年 11 月

(5) 特許等

なし

(6) その他（受賞歴等）

6. 井上陽介「東京大学医学部健康科学・看護学科 平成 20 年度卒業研究 研究奨励賞（最優秀賞）」、2008 年 3 月

申請者氏名 井上陽介

## 5. 自己評価

日本学術振興会特別研究員制度は、我が国の学術研究の将来を担う創造性に富んだ研究者の養成・確保に資することを目的としています。この目的に鑑み、申請者本人による自己評価を次の項目毎に記入してください。

- ① 研究職を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等
- ② 自己評価する上で、特に重要と思われる事項（特に優れた学業成績、受賞歴、飛び級入学、留学経験、特色ある学外活動など）

### ①研究職を志望する動機、目指す研究者像、自己の長所等

#### 研究職を志望する動機

私は研究者として、発展途上国の保健医療問題に立ち向かいたいと考えている。それは、自ら問題設定を行い、解決のために必要な知見を世の中に発信する研究者の営為が、この問題の解決に大きく役立つと思うからである。

これまで国際保健学に興味を持ってきて、気がついたことがある。それは、国際保健学の分野に、多くの「ジレンマ」が存在するということである。たとえば、失われそうな乳児の命を救うことは大切なことであるが、しかし、西洋医学が、現地の医の体系を壊すことを首肯することもできない。途上国の工業化を進めることは、貧困問題の解決には必要かもしれないが、地球の環境収容力を考えたときに、途上国の工業化を無批判に推し進めることもまた不可能である。国際保健学の様々なプロジェクトが、健康にとって負の結果を引き起こした例も存在する。

こうした数多くの「ジレンマ」は簡単に解決することではない。過去の歴史から明らかなのは、短期的なベネフィットを求め、その場の状況だけで判断しても、最適解がもたらされないということである。このような状況の中では、冷静かつ長期的な視座から問題に向かい合い続けるよりほかにおそらくないだろう。

そのとき、研究者が出来ることは少なくない。諸問題について科学的な検討を行ない、そこで得た知見を世の中に発信することで、問題解決につなげることができる。これが、私が研究者を志す理由である。

#### 目指す研究者像

- ・ 理論と実践のバランスをとりながら研究活動が続ける研究者でありたい。たとえば、国際協力の組織・機関が行なうプロジェクトにも積極的に参加し、自らの研究成果を還元するとともに、その際に得る経験を研究に活かしたい。
- ・ また、国際保健に限らず、様々なバックグラウンドを持つプロフェッショナルと交流し、自己研鑽をし続けるような研究者でありたい。

#### 自己の長所

- ・ 以下の「留学経験・学外活動」の項目で示したとおり、興味の関心の幅を広く持ち、積極的に行動することが私の最大の長所である。
- ・ また、物事を長期的に捉え、ひとつのことにじっと取り組む姿勢を常に持っていることは研究者として生きていくうえで長所になると考えている。

### ②自己評価する上で、特に重要と思われる事項

#### 受賞歴

- ・ 2007 年度東京大学医学部健康科学・看護学科の卒業論文において成績最優秀者に授与される研究奨励賞を受賞した。

#### 留学経験

- ・ 高校2年在籍時、オーストラリア NSW 州の St. John's College, Woodlawn に AFS 交換留学生として1年間滞在した。
- ・ 2009 年に華東師範大学(上海)、2010 年に北京語言大学(北京)にそれぞれ短期留学生として滞在した。

#### 学外活動

- ・ NGOでのインターンシップ:2005年(大学3年次)に一年間休学し、国際保健学分野の実践の場を経験する時間に当たった。カメルーン北西部州のクンボに存在する NGO、Navti Foundation では、HIV/AIDS の予防啓発活動(4月～9月)に従事した。ほかにも、特定非営利活動法人アフリカ日本協議会では、マラリア対策に関するハンドブックの執筆(10月～3月)、さらに特定非営利活動法人オックスファム・ジャパンでは、貧困削減のキャンペーンのための広報活動(10月～3月)を行った。
- ・ 国際保健分野の人材育成:2006年4月より国際保健医療学会学生部会で活動。地方で国際保健分野に興味を持つ学生のための勉強会企画の立ち上げ、教材の作成を担当した。また2008年4月からは、国立国際医療センターの研究補助員として、教材開発や国際保健学データベース構築のコーディネートなどを行う。
- ・ 国際協力イベントの企画:学生のみで立ち上げた国際開発プランニングコンテスト 2009(<http://idpc.in>)では、コンテスト全体のグラウンドデザイン、および使用するケースの作成の総責任者を務めた。本イベントは外務省や JICA 職員から高い評価を受けた。

申請者氏名 井上陽介